

システムの制作——文明創発の舞踏・笠井叡

河本英夫

舞踏はどの部族にも見られる。それは人間にとってもっとも基本的な動作のひとつであり、表現である。未開部族の舞踏を調査し、そこに含まれる身体の振る舞いの要素を明るみに出し、それがどのように現代に生きているかを克明に調べることはできる。基本的には、この作業は文化人類学の仕事である。また身体の仕事みから見ても、これらの身体表現がどのような科学的な合理性をもなっているかを構造的に解明することもできる。実際人間に見られる舞踏の基本形は、しばしば霊長類にも見られるからである。これは舞踏生理学とも呼ぶべき作業となる。

それに対して、身体の成り立ちを宇宙論的な大前提から考察し、そこに「人間的身体」の出現と変成を紡ぎだすように議論することはできる。若き日の笠井叡が採用したのはそうした道筋であり、この大前提が多くの先行する「神秘主義」から借りられる以上、「身体神秘学」のかたちを採る。いわば徹底的に大掛かりで、およそ日常の事象からは接点がないほどの議論へと進んでしまうのである。

神秘主義へのこよない憧憬とそこへの敏感感応のようなものが笠井叡にはあり、身の丈を超えるものにつねに触れ出てしまうという身体経験の仕組みを備えていた。そこには現状の身体はみずからに安らうことができないという日

常の感触がある。それは宇宙生成史から見たとき、人間の身体の由来を問う課題となり、他方現状の身体がつねに身の丈を超えていくものである以上、みずからの身体に成り行くことが、舞踏の形成となる。神秘主義と呼ばれるものは、他の構想にはない一つの特質を共有している。それが創造性である。これは変化や変転ではない。ないものが出現するような創発である。一般には変化のカテゴリーのなかで、運動、質変化とならんで「起滅」と呼ばれるものである。そしてこの創造の働きが創造以降も持続的に関与しているというのである。

そのため議論は、一方では宇宙生成史の枠をもち、他方では人間ならびに人間の身体運動の固有性に届かせるような議論となる。それは宇宙生成史から見たとき、身体の仕組みに繰り返し新たな発見のきっかけをもたらし、また創発を組み込むことで身体そのものの出現を論じることにもなった。おそらく世界でも類のない舞踏論を作り出したのである。ただし宇宙生成史のモデルは、現在では自己組織化の仕組みを活用するために、笠井叡の生成論は、現在ではほとんど活用されないような枠を用いていることになる。どちらかと言えば、伝統的な階層論を用いている。それでもなお身体の生成は、それとして大きなテーマである。というのも一般的な見通しでは、階層論と整合的に身体論を語りうるとは、とても思えないからである。

2017年7月の初頭に、日本病跡学会の特別講演で笠井叡は、「私の声はどこからくるのか」という講演を行った。私はその講演の司会をした。講演前に打ち合わせをしたが、講演そのものは予想通り、ほぼアドリブであった。それが最も良い講演になるという二人の了解のようなものもあった。テンションの高い講演だった。

1 聖なる身体

笠井叡の身体論に潜むのは、身体の根源への遡行であり、同時に身体はみずからの身体へと成り行くという事態を

大前提とした生成論である。この根源への遡行は、身体そのものの出現にかかわる「創造」の場所を見極めることでもある。さらに出現した身体の変容に相当する「進化」が、身体のもう一つの局面である。創造と進化が身体を考えていくさいの二つの柱となっている。『天使論』の「身体の錬金術」で考察されるのは、こうした二方向の身体の探求であり、在り方である。

「肉体の錬金術」では、創造（能動的原理）と進化（受動的原理）を設定し、「宇宙進化はすでに創造された物質、あるいは空間が「創造」とは逆方向の時間を拈出し、空間的に過去へ遡っていこうとすること」であると言われる。この部分には、奇妙な思考回路あるいは経験の仕組みが籠められている。しかもこの仕組みは、その後も維持されている。

通常の宇宙論であれば、未分化なエネルギー状態から何かが生まれ（創造）、創造後さまざまな現実の姿をとって個物が形成（進化）される。エネルギーは局所化され、物質化して、その後、局所的にはエントロピーの増大に逆行するように、新たな形状や形態が生み出されていく。創造とは、局所的なエントロピーの減少のことであり、それが人間の眼には「創発」に見える。ひとたび出現したものは時間の流れとともに、エントロピー増大方向に向かうが、局所的にはいくつかの偶然とプロセスが重なって、新たに出現してくるものがある。この部分の仕組みが自己組織化であり、概ね広域的にも局所的にも定式化されている。

ところが笠井叡の想定する進化は、相当に異なったものである。宇宙は、位階的に作られている。下等なものから高等なものへと階層的に作られている。存在物の階層関係はアリストテレスでもキリスト教でも似通ったものである。そして創造は、創造の時に降も働き続ける。この「創造の光」によって、作られた産物は、位階制を上昇方向へと登って行くのである。それが進化である。そのため進化とは、進化論で言うような分散、多様化ではなく、作りつ

けになった階層性のなかでの上昇に相当している。月は地球より下位の階層にあるが、月は創造の光を受けてやがて温まり、月そのものが月の衛星を生み出し、地球と同じようになっていくというのである。物理的にこうしたことが起きるかとは別に、笠井叡の進化のイメージを確認することはできる。

こうなるとエネルギーが物質化して質料性になることと、質料性が再度エネルギーになることが同時に逆方向に進行していることになり、エネルギー（輻射エネルギー）と質料とのいずれの移動も同時に起きていることになる。そこで創造の光のもとでは、諸世界の流出と吸収が同時に起きている。かりにこうしたことが起きるとしても、物理的には稀な条件が関与する場合のように、ほとんどありえないような話である。こうした宇宙論を支えているのは、宇宙がどこかで先験的に階層性をなしていることであり、その間を動いているはずだという感覚的確信のようなものである。個物は、これに対応して、運動としての振動と、物質をもつことになる。この振動は、流出と吸収の両面をもつはずであり、それが「霊」につながっている。

これを肉体に落とし込むと、肉体は「聖霊なき物質」から「絶対」への全階層に求められねばならず、真の運動原因を星体からあたえられ、星体は「智の肉」から運動原因をあたえられ、智の肉は主なる肉から運動原因をあたえられることになる。イメージとしては位階制のもとで振動が振動を呼び起こし、さらにその振動が次の振動を呼び起こすような仕組みが語られている。そしてこの振動には、人間の耳には聞こえないが、音楽のように周期性があり、それが「オクターヴの法則」と呼ばれる。

宇宙を巨大なひとつの振動体と見做すとき、運動の無限変化は、最高の振幅速度を有するW1の絶対振動が「創造の光」の末端に向かって無数の方向に進み、互いに衝突して、弱まったり、強まったり、阻止し合ったりして、その

末端で弛緩し、停止するまでの過程で生じる。オクターヴの法則は、こうした振動の無限変化を支配する運動法則である。

（『天使論』 177頁）

こうした宇宙論の是非や真偽を問うても、ほとんど意味のないことである。というのもこうした構想には必要に応じて必要なものを組み込むことのできるほどの隙間があり、ある意味で何でも言えてしまうようになっていいる。むしろこういう仕組みから、現在まで気づかなくてきた新たな現実性がどの程度見えてくるかである。構想の妥当性を問うのではなく、構想のもつ発見的な力を問うのである。

たとえば空気の振動や湿度の振動、光の振動まで、宇宙は多くの振動で満ちている。空気の振動の大半は、人間の耳には聞こえないが、それを「宇宙の声」と呼んでおく。この宇宙の声は、耳で聞くとは異なる仕方を受け取っているはずである。たとえば身体に及ぶ振動として受け取っている。そこには宇宙と身体の間、何らかの振動の運動もしくは共振があるに違いない。そこでの活動は、意識による認識でもなければ、意志による自己決定でもない。こうした領域に踏み込むには、認識や意図的行為とは異なるカテゴリーが必要となる。その体験の領域を「霊」と呼んでおく。霊魂のような人間の自覚的意識に相当するどこか人間的、あまりに人間的な原理ではなく、むしろ体験的領域ですでに作動している次元もしくは領域を設定するのである。だがこの次元に接近し、語るためには、実は一つのやり方しかないわけではない。

魚が一匹入ってきた。魚が一匹入ってきたことによって、ぐらりと変わってきた。それだけの違いです。魚が入って

きたおかげで、関係が、死が生を照らしているように、生が死を照らしているように、生がいきいきと。さあ、そういうなかで自由にやってごらんさい、内的に、魚が一匹私のなかに入り込んできたとき、いつのまにか魚の目が私の全体をとらえるように。魚の目のなかで、あなたの指の動きは、手の動きは何を語っているのかな。

（大野一雄『稽古の言葉』17頁）

大野一雄は、笠井叡の正真正銘の師である。こうした記述も、意識や意志の働き以前のところで起きる事態が描かれている。長年の経験の蓄積から、みずからの経験の内実在即して丁寧言葉に言葉を当てたものである。この文章は比喩でもなければ、大掛かりな概念的装置を活用して論じたものでもない。ある意味で体験的直接性在即して語っており、現象学的でさえある。だが大野一雄の弟子である笠井叡は、もつと別のやり方に踏み込んでしまった。大きな構想上の枠を張り出して、そのなかに配置をあたえるように試みながら、そのなかでなお自分の経験に照らして細部を埋めていくという手法を採用することになった。それが「文明史的な」身体や舞踏へとつながったのである。

この生成論には、笠井叡固有の資質が色濃くにじんんでいるに違いない。それはどのような個物に直面しても、つねにその背後へと触れずにはおかないという「超越への欲求」とでも呼ぶべきものである。これがあるために認識は、みずから自身を超えてしまうというような経験のモードを笠井叡は備えていたと思われる。

私にはある避けがたい厭人癖があつて、このすべての人間を同一化し、作家であろうとキャバレーのホステスであろうと、舞踏家であろうと、そういった人間の固有性の背後にあるものとしか対話したくないという願望は、私からあの「慕情」という感情を葬り去ってしまったのです。これはひとつの作品を、現実的生活という分厚い僧の所産と見

做すことを徹底的に排除してしまうものであり、わずかな肉体的、心理的苦痛ですら、宇宙的次元においてのみ追及したいという頑迷さであります。

（『神々の黄昏』135頁）

金井美恵子を論じた箇所にくこうした文面が出てくる。超越への欲求は、本性的に知の欲求と同じ軌道を備えている。つねに過度に超越する欲求を備えている。このことはたとえばイスラム神秘主義研究者の井筒俊彦に頻繁に見られるような「超越したもののへの敏感反応」ではない。井筒俊彦の場合には、この敏感反応が、感覚的確信となってしまう。ところが超越への欲求は、つねにまた仕出かしてしまつたという、みずからの頑迷さの気づきをとまなっている。おそらくこの超越への欲求は、本性的な欲求であり、たとえば何かの本を読んだり、レコードを聞くときに、すでに選択する行為として働いてしまっているのである。またこんなものを読んではまったという自分自身への頑迷さへの気づきをとまなつた一つの行為である。これと対照的に、超越したもののへの敏感感性に由来する感覚的確信は、つねに一つの妄想でもある。

また同時代的な高揚もかわっているに違いない。この時期の同時代の議論のなかには、みずからの可能性を拡張していくために、ともかくも無理やりにでも踏み出してみろという議論が広範に見られる。その息吹を笠井叡も引き継いでいる。闘う詩人と呼んだらよいのか、ともかくも感性の拡張を目指す多くの企てが行われた。笠井叡もそうした文化的伝統のなかにあった。

『天使論』に引き続き、姉妹編のように『精霊舞踏』が公刊される。舞踏のなかでの経験をどのように文明史や宇宙論に接続していくかがこの本での課題である。そうした時代の鼓動が色濃く残るような文章が各所に配置されている。

る。

無神論を虚無や永劫回帰で代用するのではなく、位階制度的宇宙を上昇していくための生理学とこの永久運動をあらかじめ侵害している理性の終末である「無感動」との闘争関係のうちでは「呼吸していること」と肉が先験的に言語以上の「形」をもっているという事実の方を明瞭に見るべきです。

『精霊舞踏』203頁

ここで述べられていることは内容よりも、内容そのものを踏み越えてしまうほどの語の勢いと、勇ましいほどの語群の羅列である。こうした言葉の建て付けでしか乗せることのできない「感性の高揚」が紛れもなく存在した時代があった。気負っていることが常態であるような時代の高揚感である。おそらく1970年代半ばぐらいまでは、日本語はこうした高揚感に溢れていたのである。現在読んでみれば、言葉にこんなエネルギーを籠めても、言葉だけがあふれかえってしまうというように感じられる。あるいはこんな力の籠め方をすれば、事柄とすれ違ってしまっても感じられる。だがそれが時代という高揚なのである。

1960年代という日本の思想がもつとも多くの企てを行い、右翼も左翼もなく、ただひたすら新たな踏み出しを模索し続け、外形的にはいつ終わるともしれぬ狂乱的騒ぎの散乱と変質職人的な精神の芸を磨き続けた時代があった。学生気質になぞらえて呼べば、「芸術全共闘」とでも呼ぶべきものであり、そこに渋谷龍彦、吉増剛三、三島由紀夫、土方巽等々の才気に満ち、到る所で不連続点を作るような企てがあった。またそれぞれの書き手が格闘を続けた時期であり、格闘することで何かが得られると感じることのできた時代でもある。そうしたなかに原理論的な構想も多く

生まれた。吉本隆明が『共同幻想論』を著し、埴谷雄高が『死霊』を断続的に描き続けていた。そうした構想は、もはや今読んでもすでに自明化された経験の基層に入り込んでいるものや、もはやどこか経験とすれ違っていると感じられるものも多々ある。だがそれらとの共振と思いのありかを綴ったのが、『神々の黄昏』（1979年）である。そんな時代の残り香りが、笠井叡の文章には到る所で感じられる。このことの表現が、「評論」というかたちを採ることになった。

蜂の巣をたたいたように理性によって恒久的に侵害された狂気は肉の輝きと快樂の娘たちを遠巻きにしながら、やがて歴史を封印するだろう。女たちにとってヒエラルヒアの階段は、肉体と物体との間に水平的に懸かっている。何故なら彼女たちは、理性と感性と直感と天才を二〇パーセントづつ平等に所有しているからだが、男たちは九七パーセントの理性と一パーセントづつの感性と直観と天才しか持っていない。舞踏の結婚はこの「二〇パーセントの物質」を一〇〇パーセントの物質に還元する。革命に武器は必要だが、この歴史の分岐点において武器は自我の倒錯的移行に力を借す。ただそれだけのことだ。

（『精霊舞踏』 231－232頁）

笠井叡に典型的に見られるのは、ある宇宙的な階層性の枠が先験的であり、その枠のなかで踏み出しができそうな箇所を見つけては言葉を当てていくという作業である。その言語化がどこかで既存の経験をさらに先へと誘導するとき、ひらめきに満ちた「理解」の感触をえることができ、それが理解の幅を大きく超えてしまえば、「神秘」という領域に入り込んでしまうことになる。

肉体の生成を文獻史的に見ると、以下のようなことになる。

歴史は肉体の源初における1. 宇宙的知覚（インツィティーフ認識）「直感的認識」から2. 地球意識（地球自身の自我に合体した肉体意識・インスピラティーフ認識）「靈感的認識」3. 民族的意識（イマギナティーフ認識・アストラル界）「情動・イメーヅ認識」を経て、4. 個体意識へ至る下降運動であり、認識はそれを遡行していく上昇運動である。したがって歴史が宇宙意識から地球意識へ下降した段階における認識行為は、宇宙意識へ上昇するだけであるが、個体意識まで下降した段階における認識行為は民族意識、地球意識、宇宙意識への三段階の上昇運動を行わなければならない。そして、この最も困難な認識行為を科せられているのが今日の私たちなのである。

（『精靈舞踏』 218－219頁）

ここでは生成論の一方の軸は、宇宙から個体化に向かう分節的で具現化方向に進む。この生成論は珍しいものではなく、未分化な総体が分節して個々の具体的個物まで連なる。これを歴史だと呼んでいる。

それに対して認識はそれを遡るものだという。すでに忘れてしまい、思い起こすことのできなくなった過去を思い起こすようなものである。その「宇宙的想起」によって思い起こされているのは、現在もはや活用できなくなってしまう、情動・イメーヅであり、靈感的認識であり、直感である。そこに触れるように作品を作り出すところに笠井叡の固有の作品世界がある。身体はまぎれもなく固有である。そこには個性がある。この個性は、宇宙的な履歴をもち、履歴をもつものの本性上、個体は個体に成り続けるしかない。そのことをうまく描くための仕組みは、人間の頭脳からは簡単には出てこない。認識も履歴をもち、履歴の延長上に語るよりないからである。

こうした生成論のもとで考察される身体は、それじたい自足した統一体にはなることはなく、また単なる分散する身体にもならない。現にある身体はつねにそれが出現してきた根源に触れ、また現にある身体そのものの身の丈を超えていく。この二つの傾向のなかで、身体はみずからに成るうとする。それが笠井叡にとっての身体表現、すなわち舞踏である。

2 身体の活動現象学

ドイツ留学を終え、笠井叡のまなざしは振付けることへと向かう。シュターナーを内面化して帰国し、「オイリュトミー」を自前の看板として掲げるようになった。作品制作、舞踏教育と続くが、まとまった著作が公刊されるのは、『カラダという書物』（2011年）である。

ここでは神祕主義的な構想が背景化し、身体の延長上に「身体であること」について、できるだけ詳細に語り始める。長い道のりだったのかもしれない。あるいはあつという間に過ぎてしまうような時期だったのかもしれない。若き日の靈感に満ちた、飛び跳ねるような思考のスタイルが消えて、身体についての語りをひとつひとつと自分で味わいながら書き進めている。だが語られた内容そのものには大きな変化はない。

魚にとっての水圧、水温の違い、また海流は、一種の音楽体験のようなもので、この感覚の働きで、魚は海の生命的な動きと一つになって生きています。そこでは「魚が海を感じている」のではなく、「海が魚を通して、海自身を感じている」と言うべきでしょう。まるで魚が「海という生命」の感覚器官であるかのように。

（『カラダという書物』34頁）

笠井勲の構想がある局面で極端なかたちで切り出した行文である。ここには二重の大前提が置かれている。ひとつは宇宙や環境はそれじたいでみずからを感じ取るほどの「生命」に満ちたものであることだ。これは宇宙全体をエネルギーの流れから見たり、それを生命に連動させたりするような若き日から見られるそれほど珍しくもないある種の宇宙論である。もう一つは、こうした宇宙論がみずからの身体を感じ取ることの延長上に語られていることである。この感じ取るというところに「触覚」が関与する。宇宙にはリズム性や流動がある。それらにすでに共振している身体がある。こうした事態を、身体の向こう側から語り出すのである。

ここに身体を感じ取りとその延長上に広がった活動する宇宙という事態の捉え方と、それを観察者の位置から記述した二つの視点の対比が含まれている。宇宙に振動する活動状態があり、他方身体はそれとして活動しており、それらは連動する。これは宇宙と身体とともに捉えるような観察者の視点であり、宇宙と身体の両者の外から対比するようなまなざしになっている。そしてこれは詳細に記述しようとすれば科学的な解明を待って仕組みにまで落とすことができる。これを外的な記述と呼んでおく。

だがこれでは動いている身体そのものの感じ取り、身体の動きのそれとしてあることそのものには構造的に届かないことになる。そうするとみずからの身体を感じ取り、その感じ取りの延長上で感触としてもっている宇宙に対しての記述とそこで起きていることの記述が、身体行為の記述であり、内的記述であることになる。視点として篩い分けてしまうと、外的記述と内的記述との対比と内的記述へと向かう際限のない思いが述べられていくことになる。

そして外的記述と内的記述の対比を行ったとき、そこに多くの課題が出現してしまう。身体は触覚を基本とするので、身体の向こう側に触れて感じ取ることと、身体が宇宙にふれているときに触れている自分自身を感じ取ることの二様の感じ取りを行っている。そうすると「海がみずからを感じ取る」という場合には、(1)身体がみずからを感

じ取るといふ事態を海が同型に行っているといふように視点の移動もしくは投射が行われているはずである。

この視点移動は頻繁に見られるもので、すでに多くの人たちが多くの場面で行っている。「事象はみずから出現する」「存在はみずから存在者となる」「物はみずから物となる」等々の表現で表されてきた。視点の移動と投射を介して、こうしたことが語られるさいには、共通にある難題に直面してしまう。それは現れであれ、物であれ、成立するものはつねに個体、個物であり、一般化された「事象」や「存在」から、どのようにして個体が成立するのかである。「海が魚をつうじて、海自身を感じる」という場合には、たとえば海は投げ込まれた石をつうじて海自身を感じる場合、海は水泳する人をつうじて海自身を感じる場合とで、異なった感触をもつはずである。「海自身を感じる」場面に必ず伴っているはずの個体化は、おそらくこの仕組みからは論じようがないと思われる。超越への欲求には、同時に起きるはずの個体化をどのように扱うのかという構造的な問題が出現してしまう。

(2) この事態が視点の移動ではなく、魚が海で泳ぐことがまさにそのことをつうじて、海からの働きかけとして感じ取られているのであれば、この感じ取りには海そのものの働きが含まれてしまっているといふ事態を比喩的に述べたものだ、というように考えることもできる。その場合、海そのものの働きを指標するさいには、「海はみずからを感じる」という定式化は、いわば過度に踏み込んだ言い回しとなる。その場合、現実の経験にさらになにもたらされているかが問われる。たとえば人間にとって身体運動するさいには、身体運動にとって重さもしくは重力は、すでに内的である。そして身体動作は重さもしくは重力と相即している。そのとき重力に即すように身体動作を行うことが、まさに重力がみずからを感じ取るようにというかたちで実行すべきことであるなら、こうした事態を比喩として語っていることになる。これは重力に即応する経験の細かさを誘導する手掛かりともなる。「海がみずから自身感じるように水にかかわりなさい」という手引き的な誘導が行われていると考えていくのである。この場合、「海はみ

ずからを感じる」というのは、方向性をもつ課題設定となる。

(3) 認識論的、行為論的な読みとして考えるのではなく、身体がそれとして身体に成り行くものであるなら、成り行くものはつねに到達点にも開始事態にも帰着されず、それ固有の流動性をもつはずである。これは「可能的現実」というような事態に対応する。身体そのものはつねに可能的現実である。海がみずから自身を感じるというのは、一つの可能的現実への誘導であると考えることができる。論理的に言えば、この可能的現実性のさなかで身体も海も流動しているが、これらの行文はそれを確信的に語っており、この感覚的確信こそが、笠井叡の固有性だと考えていくのである。この確信の成立している背景そのものが、どこかでつねに笠井叡に付き纏うある種の「宇宙論」なのである。

精神病理的には、感覚が過度に世界もしくは環境に開かれすぎているという事態であり、通常感覚を超えたところで、なお宇宙の蠢きを感じ取っている場面である。それをおのずと起こる投射というべきなのか、何かを見落としているために自動的に投射様の事態が起きるためか、宇宙と一体化していく限らない憧憬のためか、理由はともかくとして、本人が述べる「神秘学」の成立の場面にかかわる場面であり、笠井叡の固有性が出現する場所に、こうした事態がかかわっていると考えることができる。このとき主体とは名前のことだと言ってもよい。宇宙の働きが、ある事態をつうじて出現するが、それを笠井叡という名前をつうじて出現するのだと考えていくのである。

言語にかかわる考察では、「声」の問題が焦点になる。というのも声こそが、それしたい振動であり、この振動は身体に響き、宇宙に連動するからである。本人の固有の訓練のなかに実際そうした要素を組み込んでいる。「あー」という音を発しながら、あ音を消して発声を続ける。このあ音の消えた発声が声にかかわるエネルギーだと言う。発

声は、エネルギーを作り出す仕組みであることになる。現実の音になる場合には、そこに純粹に動きというものがある。そして言語の獲得以前の身体を「地球身体」と呼び、母語獲得によって形成される身体を「民族身体」と呼び、さらに記憶の固有性によって形成される身体が「個人身体」と呼ばれる。そうすると「宇宙身体」も想定することができ、これは受胎以前の身体の可能性の状態である。

そこには宇宙史的身体の可能性が、やがて地球身体となり、さらに民族身体となり、さらに記憶を介して個人身体となるというある種の生成論の図式ができあがる。そしてこうした図式の元でどの程度のことを語りうるかが、課題となる。言語の分析から、一方では「あ え い お う」のような「母声」が取り出され、他方では、「k s t n m y r w」のような純粹「父声」が取り出されていく。これを身体の部位や器官の形成と接続していくのである。運動や働きによって器官は形成されていくという大前提があり、血液は心臓によって流れるのではなく、血液の流れこそが、心臓の鼓動を生み出すというように生理機能や生理機構の形成を論じていくのである。これは働きの、現実性を作り出すという、基本的な構えを採用していることを意味する。伝統的な用語でいえば、位相空間論である。

たとえば空間が先か物が先かという問いに轉換すると、物の運動によって空間が張り出されることになり、物が先か運動が先かという問いに轉換すると、運動によって物が固有化するという構想に近い。その運動の基本が、エネルギーの流動であり、振動である。かつてドイツ自然哲学でも類似した構想があった。二様の働きが物に固有化するという仕組みである。呼吸という働きが、音を作り、やがて言語を作り、そして意味を作っていく。こうした働きや運動から現実の事象を導いていく生成論が、ここでも活用されている。

たとえば情動の動きをリセットしようとする、まず呼吸にはたらきかける。その後音の出現に働きかける。その

さいに母声と父声の分節に注意を向ける。さらに意味の出現とそれと同時に固有化している記憶に働きかける。こんなふうにして働きかける場面を詳細にしていくなのである。

これだけ大掛かりな生成論を自明の前提のように活用すると、いくつもの不明の箇所が出てしまう。ひとつは個人身体の場合で、正常とか異常の区分は起こりうるのだろうか。個体化の病的形成ということはありうるのだろうか。これは個体化という事態をさらに詳細に問い詰めていくことである。一般に運動から事象を導くのであれば、個体化は一般的な個体化に留まり、個の固有性まで到達することは難しい。この個の固有性の場合で、正常とか異常とかが分かれてくるが、そこにどのように届きうるのだろうか。舞踏で言えば、笠井叡から訓練を受けたとして、うまい人と下手な人はどのようにして分かれてくるのかという問題であり、それじたい一つの課題である。

この個の固有性に歪みが来た時には、この生成論の図式によれば、それ以前の生成段階に遡って、再度生成をリセットすることになると思われるが、生成の異系が含まれてしまうのであれば、リセットも多くの可能性を含み過ぎてしまうことになる。

また宇宙身体から地球身体となり、それがさらに民族身体となり、個人身体になるさいの「個体化の仕組み」は、それぞれの局面でまったく別の仕組みである。ここに自己組織化の仕組みが関与する。この局面でそれを語るためには道具立てが不足しすぎている。それぞれの局面で宇宙の流動やエネルギーの流れとの共振は、異なるモードとなるはずだが、それを語るためにも道具立てが不足しすぎている。そしてこうした難題を抱えながら進んでいくしかないのが現在の実情である。

参考文献

- 大野一雄『稽古の言葉』（フィルムアート社、1996年）
- 笠井叡『天使論』（現代思潮社、1976年）
- 笠井叡『精霊舞踏』（現代思潮社、1977年）
- 笠井叡『神々の黄昏』（現代思潮社、1979年）
- タンヅリー『霊・魂・体』（笠井叡訳、平凡社、1977年）
- 『銀河革命』（写真集、2004年、現代思潮新社）
- 笠井叡『カラダという書物』（書肆山田、2011年）
- 笠井叡『カラダと生命』（書肆山田、2016年）
- 『透明迷宮』（写真集、平凡社、2016年）